



# 入院中の統合失調症者に対する共感性を高めるための看護介入プログラムの有効性の検討

著者	松浦 彰護
発行年	2018
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2017
報告番号	12102甲第8722号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00152678">http://hdl.handle.net/2241/00152678</a>

氏 名	松浦 彰護				
学 位 の 種 類	博士（看護科学）				
学 位 記 番 号	博甲第 8722 号				
学位授与年月	平成 30年 3月 23日				
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当				
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科				
学 位 論 文 題 目	入院中の統合失調症者に対する共感性を高めるための看護介入プログラムの有効性の検討				
主 査	筑波大学教授	保健学博士	安梅	勅江	
副 査	筑波大学教授	教育学博士	徳田	克己	
副 査	筑波大学准教授	博士（保健学）	浅野	美礼	
副 査	筑波大学准教授	博士（保健学）	大宮	朋子	

## 論文の内容の要旨

松浦彰護氏の博士学位論文は、入院中の統合失調症者に対し共感性を高める看護介入プログラムの有効性を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

著者は、統合失調症者は円滑な他者交流ができず、対人関係での誤解を受けやすく、社会生活を維持する困難性が高いとしている。特に他者交流において相手の感情を認知した共感性が困難であり、相手から誤解を受けトラブルに発展、統合失調症者自身の自尊感情の低下傾向があるとしている。

近年の脳科学の進展は、共感性のメカニズムをさらに明らかにしていると論じている。著者は、統合失調症者への心理社会的介入として、従来の能力障害や社会的不利の観点に加え、科学的還元主義に基づいた神経可塑性に働きかける必要性を指摘している。自己意識に障害を有する統合失調症者の共感性は、自他の区別の困難さを自己主体感の障害と捉え、運動と知覚の連関活動である模倣学習により向上する可能性を指摘している。著者は、共感性は他者感情に敏感になり、自分自身に何らかの考えや感情を抱き、その後他者の視点で物事をとらえる視点取得が可能となり、他者の感情を客観的に認知するプロセスを経ると論じている。

著者の目的は、入院中の統合失調症者に対し、共感性のプロセスに基づいた看護介入プログラムを開発し、その有効性について明らかにすることである。

対象は、精神科病棟に入院中の統合失調症者 73 名のうち、急性増悪期を脱し入院治療中で看護介入プログラムを実施する統合失調症者 38 名を介入群としている。また、急性増悪期を脱した入院治療中の統合失調症者 35 名を非介入群としている。非介入群は入院治療中による変化として介入群と同期間、観察を行っている。

看護介入プログラムは、従来の社会認知機能と対人関係トレーニング、並びに共感性を育む教育的介入のプログラムを活用し、統合失調症者の対人機能を踏まえ作成している。対象とは 1 対 1 の面接方式で行い、週 1～3 回のセッションで、1 セッション 45～50 分、全 5 回で構成している。看護介入プログラムの実施前後で、対象の背景として薬物療法、陽性・陰性症状評価尺度、共感性のプロセスと指向性を含めた評価が可能な多次元共感性尺度、副次効果として Rosenberg 自尊感情尺度、精神障害者社会生

活評価尺度を測定し変化を分析している。

著者は結果として、非介入群の入院経過前後では、陽性と陰性症状評価尺度で、陽性症状得点の1回目中央値 17.00、2回目中央値 17.00、陰性症状得点の1回目中央値 17.00、2回目中央値 16.00 であり、有意に高くなったとしている。他の尺度得点には変化が認められなかったと述べている。

介入群の看護介入プログラム前後では、陽性と陰性症状評価尺度で、陽性症状得点の1回目中央値 17.00、2回目中央値 16.00、陰性症状得点の1回目中央値 17.00、2回目中央値 16.00 であり、有意に高くなったとしている。

多次元共感性尺度では、他者指向的反応を示す共感性の認知過程の「視点取得」得点の前調査中央値 17.00、後調査中央値 20.00、他者指向的反応を示す共感性の感情過程の他者指向的反応得点の前調査中央値 18.00、後調査中央値 22.00、自己指向的反応を示す共感性の認知過程の想像性得点の前調査中央値 16.00、後調査中央値 18.00 と、介入後で有意に高くなったとしている。

Rosenberg 自尊感情尺度では、尺度総得点の前調査中央値 25.00、後調査中央値 30.00 であり、有意に高くなったとしている。また精神障害者社会生活評価尺度では、LASMI-I 総得点の前調査中央値 15.00、後調査中央値 15.00、会話得点の前調査中央値 6.00、後調査中央値 6.00 であり、有意に高くなったとしている。

著者は考察として、入院中の統合失調症者の地域移行支援において、精神症状の再燃を予防する薬物療法の遵守と心理社会的介入の両面による支援の必要性があるとしている。非介入群 30 名と介入群 35 名は、女性の割合が介入群に多かったが他の項目は近い値が多く、ほぼ同様の集団と考えられるとしている。薬物療法は、両群ともに全国平均処方量より少ない処方量であったが、精神症状は入院経過における統合失調症者の特徴を示すとしている。

介入群 35 名は、著者との会話を通した看護介入プログラムへの参加により、言語的コミュニケーションに必要な適切な態度や振る舞いが改善された可能性があるとしている。また看護介入プログラムの各セッションを通した共感性の学習経験の反復が、自己中心性を有する統合失調症者の共感性における他者指向性の改善に有効に働きかけた可能性があるとして論じている。看護介入プログラム後の自尊感情の向上は、入院中の統合失調症者の他者交流に対する自信の回復につながる可能性があるとして解釈している。

著者は結論として、入院中の統合失調症者に、運動知覚の連関活動である模倣学習を視座とする共感性を高めるための看護介入プログラムを実施した結果、プログラムの有用性が明らかになったと結んでいる。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

松浦彰護氏の学位論文は、共感性に関する広範な最新研究成果を活用し、入院中の統合失調症者に対する共感性を高める看護介入プログラムを新規に開発するとともに、その有効性について多角的な視点で各種指標を用い根拠づけ、看護実践における適用の可能性と限界を明らかにした点で、看護科学論文として特に優れている。

平成 30 年 1 月 30 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（看護科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。